

作況ニュース（第5号）

水 稲
大 豆

（発行：令和8年7月9日）（編集：令和8年7月7日）

発行：秋田県農林水産部

水 稲

幼形期早まる！確実な生育・栄養診断を！

- － 中干しは幼形期前に終了すること －
- － 高温傾向続く、葉色の低下に注意！ －

1 今後の気象の見通し

（1）東北地方1か月予報（7月4日～8月3日）【令和8年7月2日 仙台管区气象台発表】

<予想される向こう1か月の天候>

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。期間の前半は、気温がかなり高くなる可能性があります。平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、多い確率40%です。日照時間は少ない確率40%です。

週別の気温は、1週目（7月4日～10日）は、高い確率60%です。2週目（7月11日～17日）は、高い確率60%です。3～4週目（7月18日～7月31日）は、並及び高い確率40%です。

次回の予報発表予定： 1か月予報 毎週木曜日14時30分
3か月予報 7月21日（火）14時

【季節予報】

<https://www.jma-net.go.jp/sendai/data/tenkou/forecast/forecast.html>

【2週間気温予報 毎日随時更新】

<https://www.data.jma.go.jp/cpd/twoweek/?fuk=32>

2 県内の概況

（1）気象経過

【秋田地方气象台】

6月下旬： この期間、天気は周期的に変化した。21日と22日は低気圧の影響により、大雨の所があった。旬平均気温は平年並または低い。旬降水量は多いまたは平年並。旬間日照時間は多い。

[旬統計値（秋田）]

	気温 (℃)	平年差 (℃)	階級区分	降水量 (mm)	平年比 (%)	階級区分	日照時間 (h)	平年比 (%)	階級区分
6月下旬	20.6	-0.1	平年並	74.0	127	多い	75.9	143	多い

(2) 本田の生育

1) 移植栽培

① 定点調査ほの生育概況

水稻定点調査（7月6日）が8地域振興局によって実施された。

「あきたこまち」（県内64地点）は、草丈51.3cm（平年比97%）、㎡当たり茎数564本（平年比112%）、葉数10.6葉（平年差+0.4葉）、葉緑素計値42.3（平年比94%）だった。

「ひとめぼれ」（県央8地点）は、草丈50.7cm（平年比93%）、㎡当たり茎数563本（平年比100%）、葉数10.4葉（平年差+0.2葉）、葉緑素計値39.0（平年比96%）だった。

表－1 定点調査結果（各地域振興局調査：7月6日）

品種	地区	草 丈			㎡当たり茎数			葉 数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
あきたこまち	県北	50.7	87	95	585	126	109	10.7	0.4	0.4	41.6	96	93
	中央	55.2	90	102	579	127	122	10.7	0.2	0.5	40.4	95	92
	県南	50.2	83	96	541	122	112	10.5	0.4	0.4	43.6	98	96
	全県	51.3	86	97	564	124	112	10.6	0.4	0.4	42.3	96	94
ひとめぼれ	中央	50.7	83	93	563	108	100	10.4	0.1	0.2	39.0	102	96

② 農試気象感応試験の生育概況（あきたこまち）

7月5日現在、標植では、草丈58.9cm（平年比108%）、㎡当たり茎数693本（同118%）、葉数11.0葉（平年差+0.5葉）、葉緑素計値40.4（平年比94%）だった。また晩植では、草丈50.0cm（平年比95%）、㎡当たり茎数698本（同127%）、葉数10.5葉（平年差+0.3葉）、葉緑素計値40.9（平年比92%）だった。両区で茎数はかなり多く、葉色は淡かった。葉数が多いことから生育は平年より進んでいる。

表－2 農試気象感応試験の生育概況（7月5日）

試験区	移植日	草 丈			㎡当たり茎数			葉 数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
標植	5月15日	58.9	91	108	693	139	118	11.0	+0.4	+0.5	40.4	93	94
晩植	5月25日	50.0	77	95	698	125	127	10.5	+0.2	+0.3	40.9	100	92
理想生育量*		46～51(cm)			478～576(本/㎡)			9.5～10.0(葉)			44～46(SPAD値)		

*1 あきたこまちにおける最高分けつ期頃(7月上旬)の理想生育量(中央地域)

注) 平年値は、標植はH12～R7、晩植はH29～R7の平均。

また、標植では幼穂長が2mm以上に成長していたことから、本年の幼穂形成期は7月5日（平年差－5日）であり、同ほ場で試験開始した平成12年以来、最速だった。幼穂形成期の生育概況としては、7月5日調査と同様に茎数はかなり多いが、草丈、葉数、葉緑素計値は概ね平年並だった。

表－3 農試気象感応試験の生育概況（幼穂形成期）

試験区	幼穂形成期	草 丈			㎡当たり茎数			葉 数			葉緑素計値		
		本年	前年比	平年比	本年	前年比	平年比	本年	前年差	平年差	本年	前年比	平年比
		(cm)	(%)	(%)	(本)	(%)	(%)	(葉)	(葉)	(葉)	(%)	(%)	(%)
標植	7月5日	58.9	86	97	693	148	121	11.0	±0.0	±0.0	40.4	97	97
理想生育量*		58～63(cm)			471～559(本/㎡)			10.5～10.9(葉)			40～44(SPAD値)		

注1) * あきたこまちにおける幼穂形成期頃の理想生育量（中央地域）

2) 直播栽培

7月6日の定点調査（農試作況ほ場合含む）の全県平均は、草丈43.3cm（平年比102%）、㎡当たり茎数674本（同115%）、葉数9.1葉（平年差0.0葉）、葉緑素計値37.9（平年比88%）だった。草丈と葉数は平年並だが、ほ場間差が大きい状況である。茎数が多いほ場や中干しを強めに行っているほ場では、葉緑素計値が平年と比較して低くなっている。

表－4 調査結果（湛水直播 あきたこまち、農試および農業振興普及課7月6日調査）

設置場所	草 丈			㎡当たり茎数			葉 数			葉緑素計値		
	本年 (cm)	前年比 (%)	前年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	前年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	前年比 (%)
農試	48.9	98	113	838	224	161	9.1	+0.1	+0.3	39.3	93	94
大館市	37.6	96	94	724	162	123	8.5	-1.4	-0.6	31.0	72	72
井川町	43.6	98	102	520	90	86	8.8	-0.7	-0.3	32.8	76	75
美郷町	44.9	87	98	593	102	96	9.1	-0.4	-0.3	40.4	100	94
横手市	41.6	95	104	693	107	107	10.0	+0.1	+1.1	45.7	110	105
全県	43.3	95	102	674	137	115	9.1	-0.5	0.0	37.9	90	88

注1) 平年値：過去10年間（H27～R7）の平均値

(3) 病害虫の発生概況

1) 葉いもち

B L A S T AM法による感染好適判定では、県中央部・県南部を中心に6月21～23日、6月26～27日、7月3日に感染好適な気象条件が確認された。

予察ほ、防除適期決定ほにおける病斑増加状況調査（品種：「ナツミノリ」、いもち病接種条件下での調査）では、7月3日までに病斑増加は認められていない。

2) 斑点米カメムシ類

各予察灯（5地点）における5月1半旬～6月6半旬の総誘殺数はアカスジカスミカメが90頭（平年109.5頭）、アカヒゲホソミドリカスミカメが216頭（平年166.0頭）でいずれも平年並だった。

3 当面の技術対策（7月中旬）

6月5半旬は最高気温がやや低かったものの、6月6半旬以降は高温で経過している。加えて多照により、葉数が平年より多く、茎数もかなり多い。また少雨で経過したことから、中干しによる田面の乾燥は順調で、中干しを終了している地点も多い。今後も高温予報であるため、強い中干しは避け、長靴の底が少し沈む程度で中干しを終了する。既に幼穂形成期に入っているほ場もあることから、生育・栄養診断で生育状況を見極め、穂肥等を適切に実施する。

（1）中干し終了の目安

幼穂形成期に土壤水分が不足すると1穂粒数の減少を招くため、中干しは十分に乾かなくても幼穂形成期前に終了し、間断かん水に切り替える。中干し終了が遅れないよう、生育を見極めることが大切である。

なお、アメダス観測地点の平均気温と発育モデルから予測されるあきたこまち（中苗移植）の幼穂形成期（幼穂長2mm）は、7月6日以降の気温が平年より2℃高く経過した場合、県北地域の田植え盛期（5月20日）では、大館アメダス観測値で7月13日の予測となり、中央地域の田植え盛期（5月19日）では、大正寺アメダス観測値で7月12日、県南地域の田植え盛期（5月23日）では、横手アメダス観測値で7月11日の予測結果となった。しかし、実際の生育は予測より早い場合があり、幼穂の生育程度をほ場で確認する。また減数分裂期も平年より早まることも予想され、時機を逸しないよう栽培管理を徹底する（資料編p.21、表－5、表－6参照）。

直播水稻では、転び型倒伏を防止するため、中干し終了後も落水期間をやや長めとする間断かん水により、土壤硬度を保つようにする。また、中干しが十分に出来なかった場合や、軟弱なほ場では、反復落水管理（穂ばらみ期や登熟初期の1週間程度の落水）を実施する。

（2）栄養診断に基づいた穂肥

本年の生育は茎数がかなり多く、草丈は平年並、葉色は平年並～淡いため、今後は急激な葉色低下に注意する。また葉数の進みが早いため、適期に診断を行い、追肥等の目安として活用する。

具体的には、幼穂形成期（幼穂長2mm）を確認し、栄養診断により穂肥の時期と量を決定して、適正な粒数（目標収量570kg/10a、㎡当たり粒数：30.3～31.5千粒）を確保する。なお、幼穂形成期に草丈が長いほ場では、穂肥は慎重に行う。（資料編p.22、図－6、図－7参照）。

（3）カドミウム含有米の発生防止

カドミウム含有米の発生が懸念される地域で「あきたこまちR」以外の品種を作付している場合には、カドミウムの吸収を抑制するために、常時湛水状態を出穂前後各3週間は維持し、田面が空気に触れないようにする。（資料編p.24関連記事掲載）

(4) 葉いもちの防除

ほ場を巡回し、葉いもちの発病がないか確認する。特に、葉色の濃いほ場や生育過剰なほ場では注意する。発病がみられる場合は、直ちにブラシン剤またはノンブラス剤（予防剤と治療剤の混合剤）で茎葉散布を行う。その後は必要に応じてビーム剤を追加で散布する。

なお、薬剤の使用にあたっては、薬剤の使用回数及び成分の総使用回数を超えないよう注意する（令和8年6月30日発表 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第3号以下、「発生予報 第3号」を参照）

(5) 雑草管理と斑点米カメムシ類の防除

農道や畦畔の草刈りは、イネの出穂15～10日前（平年7月16～21日頃）までに地域で一斉に行う。なお、水田畦畔刈り込み代用剤を使用する場合は、7月中旬までに散布する。

水田内のノビエやホタルイ等の雑草は、アカスジカスミカメの水田内への侵入を助長するので、除草対策を徹底する。中・後期除草剤の使用にあたっては、使用時期に注意するとともに、ほ場の発生草種や生育程度を観察して、適切な薬剤を選択する。

（令和8年6月22日発表の令和8年度農作物病害虫防除対策情報 第5号及び「発生予報 第3号」を参照）

(6) 紋枯病の防除

穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期にバンタック剤、バリダシン剤、モンカット剤、モンセレン剤のいずれかを株元に到達するように散布する。

モンガリット粒剤やリンバー粒剤を使用する場合は、前年多発したほ場で本病を対象とした育苗箱施用剤を使っていないほ場に限る。散布時期はモンガリット粒剤が出穂20～10日前、リンバー粒剤が出穂15～5日前である。（「発生予報 第3号」を参照）

(7) 稲こうじ病防除の防除

前年多発したほ場では出穂20～10日前に、ドイツボルドーA、ボルドー、トライフロアブル、Zボルドー粉剤DL、モンガリット粒剤のいずれかを散布する。

（「発生予報 第3号」を参照）

(8) ごま葉枯病の防除

砂質かつ、秋落ちが認められるCECが低い水田（15meq/100g未満）において、幼穂形成期～穂ばらみ期に本病の発病がみられる場合は、出穂直前と穂揃期にノンブラスフロアブルまたはブラシンフロアブルで防除する。

(9) 気象変化に対応した栽培管理

- 1) フェーンなど乾燥した風が強く吹く場合は湛水する。用水の利用は地域内で計画的に行い、用水量に応じた水管理に努める。
- 2) 大雨のおそれがある場合は、事前に排水路等の点検や補修を行う。冠浸水被害を受けたほ場では、速やかな排水に努める。
- 3) 冷害危険度の高い地域では、日平均気温20℃以下の低温や最低気温17℃以下が予想される場合、幼穂形成期に入ったら水深を10cm位に保つ深水管理（前歴深水管理）を10日間程度実施する。
（令和8年稲作指導指針p.123～136参照）

(10) 農薬の飛散防止と安全使用の徹底

- 1) 農薬散布前に使用農薬のラベルの適用作物・使用方法等を確認する。
- 2) 農薬散布時は、周辺作物などへの飛散防止対策を徹底する。
- 3) 健康管理や服装・装備等を万全にし、散布作業は涼しい時間帯に行う。
- 4) 農薬散布後は、防除器具を確実に洗浄する。
- 5) 防除履歴は必ず記録する。

(11) 農作業中の熱中症及びクマ対策の徹底

- 1) 高温時の作業は極力避け、日陰や風通しの良い場所で作業する。
- 2) 喉の渇きを感じる前に、こまめに水分・塩分を補給する。
- 3) 単独作業は避け、複数人で作業を行うよう心がけて、時間を決めて連絡をとり合う。
- 4) 帽子や吸湿速乾性の衣服の着用や空調服や送風機を活用する。
- 5) 熱中症が疑われる場合には、作業を中断し、涼しい環境へ避難し水分を補給するなど応急処置に努める。症状が改善しない場合は早めに医療機関で診察を受ける。
- 6) 農作業中を含め、クマ対策を徹底する。
 - ・「クマダス(<https://kumadas.net/>)」で出没をチェックし、クマとの遭遇を避ける。
 - ・作業中はクマ避けの鈴など音のでるものを常に携帯する。

【時期別・主要作業別指導事項】

月 旬	作業の種類	主 な 指 導 事 項
7 月中旬 ～ 7 月下旬	水管理	○中干しは、幼穂形成期前に終了する。 ○中干し後は間断かん水とする。 ○中干しが十分にできなかったほ場では、中干し終了後の間断かん水時に落水期間をやや長くし、田面の乾燥を図る。 ○直播栽培では、落水期間をやや長めとする間断かん水を行い、軟弱ほ場では反復落水管理を行う。 ○カドミウム含有米の発生が懸念される地域で、「あきたこまちR」以外の品種では、出穂前後各3週間は湛水管理とする。
	栄養診断の実施	○移植栽培で、追肥体系の施肥方法の場合は、幼穂形成期を確認し、栄養診断結果に基づき、追肥の時期と量を慎重に決定する。
	葉いもちの検診と防除	○ほ場を巡回し、葉いもちの発病がないか確認する。 ○葉いもち病の発病が見られるほ場では、直ちに防除する。
	雑草管理と斑点米カメムシ類の防除	○斑点米カメムシ類の増殖を抑える（密度抑制）ため、農道・畦畔の草刈りは稲が出穂する15～10日前までに行う。 ○水田内のノビエやホタルイ等の除草を徹底する。中・後期剤を散布する際は使用時期に注意する。
	紋枯病の防除	○粒剤を使用する場合は、前年多発したほ場や本病を対象とした育苗箱施用剤を使っていないほ場に限定し、薬剤に応じて出穂20～10日前、又は出穂15～5日前に防除する。 ○穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期に茎葉散布剤で防除する。
	稻こうじ病の防除	○前年多発したほ場では出穂20～10日前に、ドイツボルドーA、ボルドー、トライフロアブル、Zボルドー粉剤DL、モンガリット粒剤のいずれかを散布する。 ○粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入れない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しはしない。
	ごま葉枯病の防除	○砂質かつ、秋落ちが認められるCECが低い水田（15meq/100g未満）において、幼穂形成期～穂ばらみ期に本病の発病がみられる場合は、出穂直前と穂揃期にノンブラスフロアブルまたはブラシンフロアブルで防除する。
	農薬飛散防止と安全使用	○散布前に使用農薬のラベルの適用作物・使用方法等を確認し、散布時は周辺作物などへの飛散防止対策を徹底する。 ○散布作業は涼しい時間帯に行い、休憩・水分補給を適宜行う。

大豆

適期に中耕・培土の実施を

- － 大雨に備えた明きよの点検・補修 －
- － 残草の確認と雑草対策の徹底 －

1 大豆の生育概況

(1) 全県の概況（各地域振興局調べ）

播種作業の進捗は、6月に20mm程度の降雨が複数回あったことから、平年より1～2日程度遅れた。播種盛期は6月14日（平年差＋1日）、播種終期は6月30日（平年差＋2日）だった。6月は適度な降雨があり、3～4半旬にかけて高温傾向で経過したことから、出芽・苗立ちは概ね良好だった。

(2) 農業試験場（大豆作況調査試験）

6月30日における「リュウホウ」（標播、6月3日播種）の生育は、草丈22.9cm（平年比94%）、主茎節数4.3節（平年差－0.1節）と、草丈は平年より短く、主茎節数は平年並であった（表－1）。

6月18日に播種した「リュウホウ」（晩播）の出芽期までの日数は、6日（平年差－2日）であった。

表－1 農業試験場における大豆の生育概況（7月1日）

品種名	草 丈			主茎節数		
	本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (節)	前年差 (節)	平年差 (節)
リュウホウ	22.9	70	94	4.3	-0.8	-0.1

注1) 農試作況調査ほ場の6月3日播種（標播）の調査データを示す。

注2) 主茎節数は子葉節を1とする。

注3) 平年値はH28～R7年のうち最大値と最小値を除いた8か年の平均値。

2 当面の技術対策

梅雨の終わりは大雨が多いため、引き続き排水対策を徹底し、湿害を回避するとともに、土壌水分の状態等を見極め、適期の培土作業に努める。

(1) 排水対策の徹底

降雨による停滞水が速やかに排水されるよう、明きよの点検や補修を随時行う。

（令和8年6月30日発行の作況ニュース第4号参照）

(2) 培土の実施

降雨に伴い雑草の発生は旺盛となることが懸念される。このため、生育の安定化だけでなく、雑草防除の観点からも適期の培土作業は重要となるため、次の事項に注意して適期に培土を行う。

- 1) 遅い時期の培土は、断根や作物体損傷による生育への悪影響のおそれがあるため、最終培土は遅くとも開花の10日前には終了する（令和6年大豆指導指針p.48参照）。農試作況調査における「リュウホウ」の平年の開花期は、6月3日播種が7月26日、6月20日播種が8月5日である。
- 2) 培土作業は収穫時の作業性も考慮し、最終的な培土の高さを本葉第1節が隠れない15～20cm程度とする（令和8年6月30日発行の作況ニュース第4号参照）。過度の培土は不定根の発生を悪くするほか、最下着莢高が低くなりコンバイン収穫時の収穫ロスや汚損粒の発生にもつながる。
- 3) 土壌水分が高い時の培土は、株元への培土が不十分となり、株元に残った雑草はその後大型化し、除草剤等による除草が困難になる。このため、最終培土は土壌表面がある程度乾いた状態で行い、畦間の土を砕土・攪拌しながら、確実に大豆の株元に土を寄せる。

(3) 雑草防除

中耕・培土で雑草を抑えられなかった場合や、土壌水分が高く中耕・培土が出来なかった場合などは、手取りまたは大豆生育期処理除草剤により雑草防除を行う。大豆生育期処理除草剤は、薬剤によって使用時期等が異なるので使用基準を確認し、適期に防除する。（令和8年度版秋田県農作物病害虫・雑草防除基準p.351～358を参照）

1) ノビエ、メヒシバ等のイネ科雑草

ナブ乳剤、ワンサイドP乳剤、ポルトフロアブルのいずれかを散布する。

2) タデ類、アメリカセンダングサ等の広葉雑草

大豆バサグラン液剤の効果が高い。ただし、適用品種はリュウホウに限る。

なお、大豆バサグラン液剤は、高温時や日射が強い場合、湿害等による生育不良のほ場で薬害が助長されることがあるため、散布日の天候や生育を考慮して散布する。

3) アレチウリ、アメリカアサガオ、マルバルコウ等のつる性の帰化雑草（資料編p.25参照）やシロザ等の広葉雑草

アタックショット乳剤の効果が高い。ただし、湿害等により大豆が軟弱気味に生育している場合、処理後に連続した降雨が予想される場合及び処理後3日間の平均気温が17℃を下回ると予想される場合は、強い薬害を生じるおそれがあるため使用しない。

4) 取りこぼしのあった雑草や大型化する雑草、防除の難しい雑草（シロザ・エノキグサ・ツユクサ・イヌホオズキ・帰化アサガオ類・アレチウリ等、資料編p.25参照）

バスタ液剤による畦間・株間処理または大豆バサグラン液剤、ザクサ液剤、ラウンドアップマックスロードによる畦間処理を行う。また、帰化アサガオ類やアレチウリに対してはバスタ液剤またはザクサ液剤を使用する。なお、バスタ液剤とザクサ液剤の成分は同一成分として総使用回数に数えるので注意する。

畦間・株間処理や畦間処理にあたっては、薬液付着に伴う薬害を防止するため、専用の飛散防止カバーや専用ノズルを必ず使用する。

(4) 病虫害防除

当面は食葉性害虫（ツメクサガ、コガネムシ類等）やアブラムシ類の発生に注意し、ほ場の観察により早期発見に努め、発生状況に応じて防除を行う。

発生予報第3号では、食葉性鱗翅目幼虫の発生量がやや多いと予報されている。防除対象がツメクサガの場合は、幼虫の発生初期（若齢期）にエルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブル、プロフレアSC、ヨーバルフロアブルのいずれかを散布する。

ハスモンヨトウやオオタバコガなどの長距離移動性害虫は、急激に発生量が増加することがあるため、今後の予察情報に注意する。

(5) 開花期以降の土壌水分の保持

大豆は、開花～子実肥大期にかけて水分を多く必要とし、乾燥が続くと減収することがあるため、1)、2)の対策により、大豆の好適な地下水位（40cm程度）の保持に努める。

なお、著しい高温少雨に遭遇した場合の対策については、3)、4)にある畝間かん水や明きょへのかん水等があるが、十分な用水量が確保でき、速やかな排水が行えるほ場など実施可能な条件に限られるため、ほ場条件を確認した上で実施を検討する。

1) 梅雨明け後の暗きょの操作

梅雨明け後は、暗きょ栓を閉めて土壌中の水分の保持に努める。ただし、まとまった降雨がある場合は、暗きょ栓を開いて排水を図る。

2) 地下かんがいシステムが備わっているほ場について

梅雨明け後は、暗きょ栓を閉めて地下水位を40cmに設定し、降雨を土壌に貯留するように努める。

地下かんがいは、晴天が1週間以上続き土が白く乾燥している場合や、日中に大豆の葉が立ち、半分以上の葉で裏面が見える場合等を目安にして実施する。この時の地下水位は20～30cm程度に設定し、1日給水した後に、暗きょ栓を開放して排水する。

3) 畝間かん水の目安と留意点

畝間かん水は、晴天が1週間以上続き土が白く乾燥している場合や、日中に大豆の葉が立ち、半分以上の葉で裏面が見える場合等を目安に実施する。

30a以上のほ場の場合は、ほ場を2～3区画程度に分け、1日1区画ずつ2～3日に分けて実施し、畝の崩壊と水口付近の湿害を防ぐ。ほ場（区画）全体に水が行き渡ったら水口をしっかりと止め、速やかに排水する。なお、かん水は、気温・地温が低下する朝夕の時間帯に行う。

ただし、水回りが悪いほ場や、速やかな排水を行えないほ場では、湿害等が発生することがあるため実施しない。

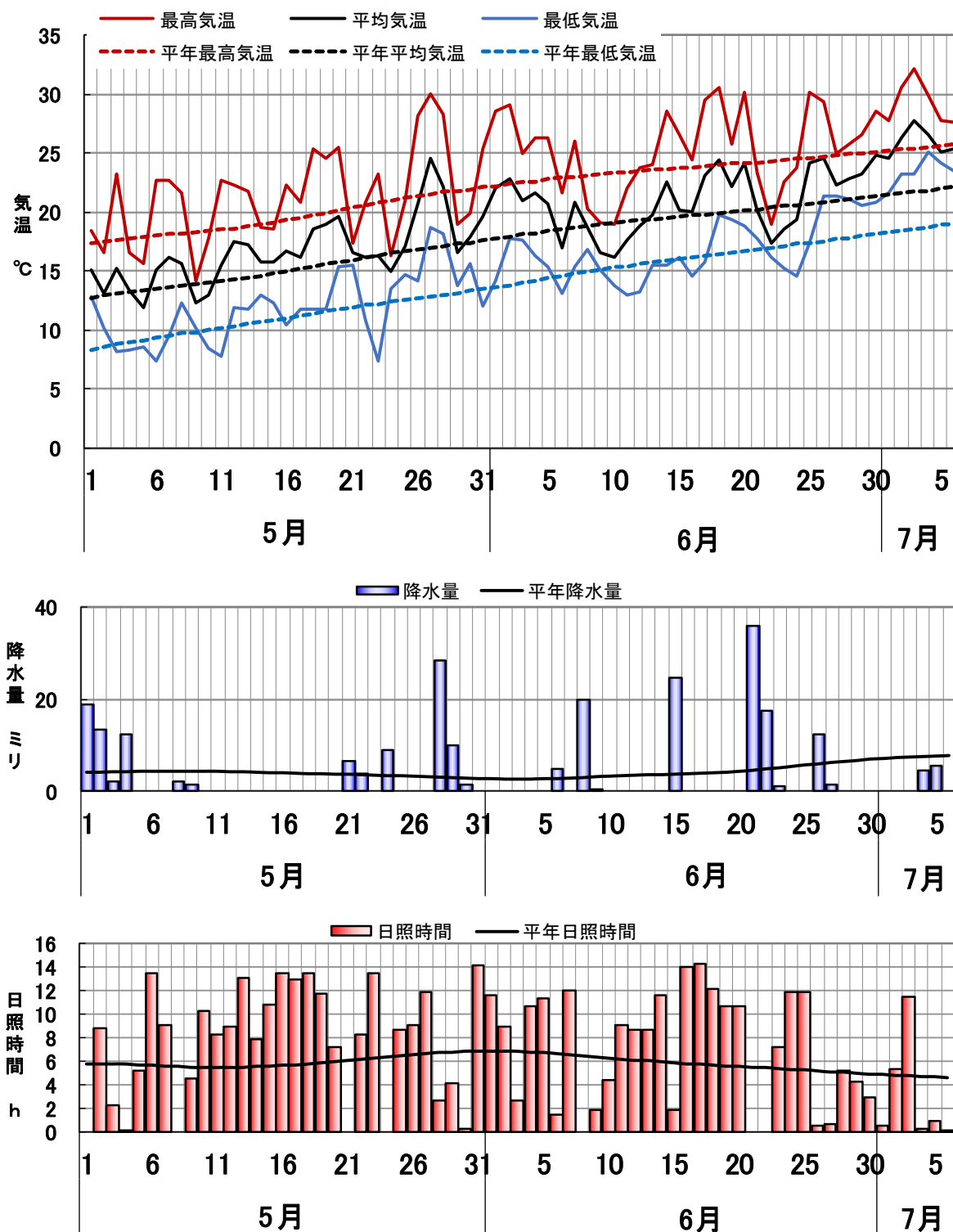
4) 明きょへのかん水の目安と留意点

排水口を閉じ、明きょ全体に水を行き渡らせ、その後は速やかに排水する。

資 料 編

1 気象経過

(1) 令和8年5月1日から7月6日の気象経過図（観測地点：秋田地方气象台）

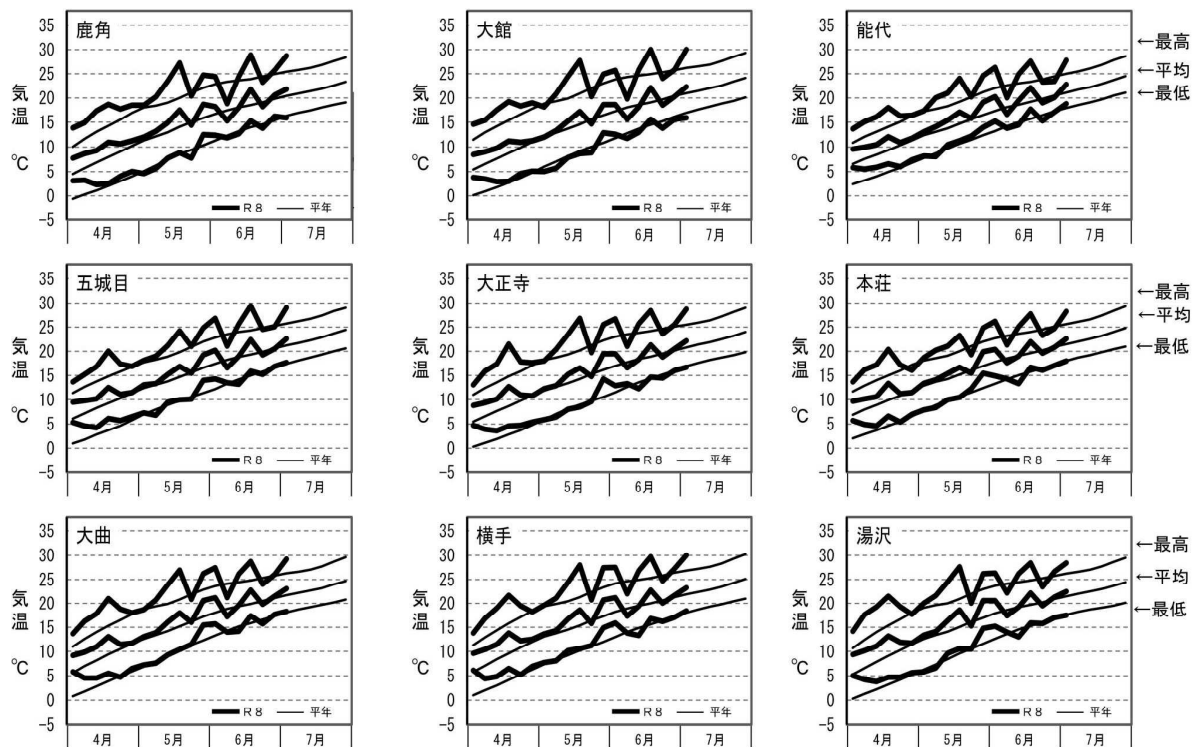


(2) 旬別気象状況 (秋田市)

(秋田地方気象台HPより)

時 期 項 目	6 月上旬		6 月中旬		6 月下旬		6 月 計	
	本 年	平年比較	本 年	平年比較	本 年	平年比較	本 年	平年比較
平均気温(℃)	19.7	+1.3	21.3	+1.7	20.6	-0.1	20.5	+0.9
降 水 量(mm)	25.5	108 %	24.5	60 %	74.0	127 %	124.0	101 %
日照時間(h)	64.6	94 %	101.4	176 %	75.9	143 %	241.9	135 %

(3) 地域別気象経過 (アメダス観測地点、半旬別気温、7月5日現在)



2 定点調査結果（各地域振興局調査 7月6日）

表－1 定点調査結果（品種：あきたこまち）

地域 振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
鹿 角	5	46.8	80	92	598	129	99	10.5	0.0	0.3	43.2	95	95
北秋田	9	51.6	87	96	612	125	113	10.7	0.3	0.3	40.5	96	92
山 本	9	51.8	90	97	551	124	112	10.9	0.8	0.7	41.9	97	94
秋 田	10	56.3	91	102	567	125	119	10.9	0.3	0.5	39.9	93	90
由 利	2	49.2	83	101	638	136	135	10.2	0.2	0.5	42.9	106	100
仙 北	10	50.1	82	96	562	125	113	10.5	0.4	0.5	42.2	95	94
平 鹿	11	49.3	82	96	502	118	107	10.4	0.3	0.4	43.9	97	96
雄 勝	8	51.7	84	98	570	122	116	10.5	0.4	0.3	45.1	101	99
全県平均	64	51.3	86	97	564	124	112	10.6	0.4	0.4	42.3	96	94
7月5日の 理想生育量		目標	下限	上限	目標	下限	上限	目標	下限	上限	目標	下限	上限
	県北	47	45	50	550	512	588	9.8	9.6	10.0	43	42	44
	中央	49	46	51	527	478	576	9.8	9.5	10.0	45	44	46
	県南	47	45	50	462	440	484	9.8	9.6	10.0	44	43	45

表－2 定点調査結果（品種：ひとめぼれ）

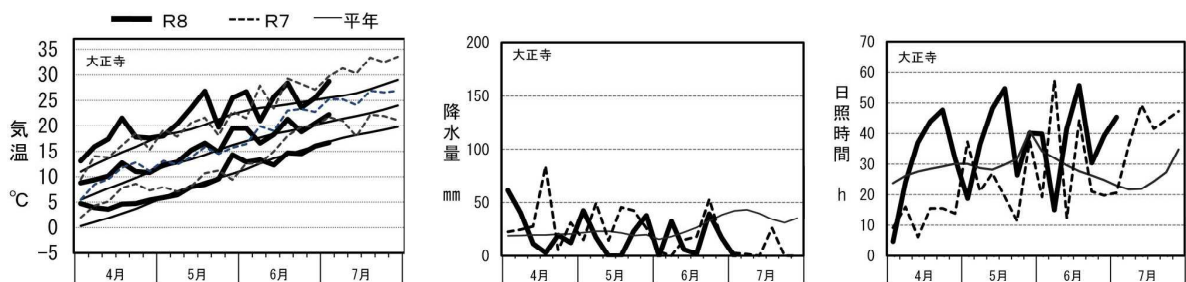
地域 振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
秋田	2	43.5	80	86	579	114	102	9.9	-0.5	-0.2	36.1	88	87
由利	6	53.2	84	95	558	105	100	10.6	0.3	0.3	40.0	108	100
中央地区平均	8	50.7	83	93	563	108	100	10.4	0.1	0.2	39.0	102	96

3 関連成績

（1）気象感応試験

1）稲作期間の気象（6月下旬から7月1半旬）

6月5半旬以降は、最低気温が平年並に経過し、最高気温は平年より高く経過した。
また、降水日が少なく、日照時間は平年よりかなり多かった。



図－1 令和8年の稲作期間中の気象経過（アメダス観測地点「大正寺」、半旬別、7月5日現在）

2) 生育概況

草丈は、標植で平年より長く、晩植ではやや短かった。茎数は、両区でかなり多く、特に晩植で多かった。葉数は、標植で平年差+0.5葉、晩植で+0.3葉と平年より多く、生育は進んでいるとみられた。葉緑素計値は、両区とも平年より低かった。標植では6月19日から、晩植では6月25日から中干しを開始し、降水量が平年より少なかったことから、田面の乾燥は十分だった。

表－１－１ 気象感応試験（７月５日）の生育概況（あきたこまち）

試験区	移植日	草 丈					㎡当たり茎数					葉 数					葉緑素計値				
		R8 cm	R7 cm	R7比 %	平年 cm	平年比 %	R8 本	R7 本	R7比 %	平年 本	平年比 %	R8 葉	R7 葉	R7差 葉	平年 葉	平年差 葉	R8	R7	R7比 %	平年	平年比 %
標植	5月15日	58.9	64.6	91	54.5	108	693	498	139	589	118	11.0	10.6	+0.4	10.5	+0.5	40.4	43.3	93	43.1	94
晩植	5月25日	50.0	64.8	77	52.9	95	698	560	125	550	127	10.5	10.3	+0.2	10.2	+0.3	40.9	40.8	100	44.3	92

注) 平年値は、標植はH12～R7、晩植はH29～R7の平均。

幼穂長の発育調査から、標植では7月4日に1mm、7月5日に2mm以上となり、平年より5日早く幼穂形成期になった。幼穂形成期の生育概況として、茎数はかなり多いが、草丈、葉数、葉緑素計値は概ね平年並だった。また幼穂形成期の生育・栄養診断から、茎数が多いことにより生育型はV-2（生育過剰）に診断された。

表－１－２ 気象感応試験（標植、幼穂形成期）の生育概況（あきたこまち）

試験区	移植日	草 丈					㎡当たり茎数					葉 数					葉緑素計値				
		R8 cm	R7 cm	R7比 %	平年 cm	平年比 %	R8 本	R7 本	R7比 %	平年 本	平年比 %	R8 葉	R7 葉	R7差 葉	平年 葉	平年差 葉	R8	R7	R7比 %	平年	平年比 %
標植	5月15日	58.9	68.9	86	60.7	97	693	467	148	572	121	11.0	11.0	±0.0	11.0	±0.0	40.4	41.7	97	41.6	97

注) 平年値は、標植H12～R7の平均

表－１－３ 気象感応試験（標植、幼穂形成期）の生育・栄養診断結果

	生育量($\times 10^3$)	栄養診断値($\times 10^5$)	生育型(診断結果)
標植	40.8	16.5	V-2型(生育過剰)
理想生育量	32.2～37.0	11.9～14.2($\times 10^5$)	

3) 出葉状況

標植の出葉は、第7～10葉は平年差－3から－4日で経過したが、第11葉は－5日とさらに早かった。晩植では、第7～11葉は平年差－2から－3日と早く経過した。両区とも平年より早い出葉だが、標植の早さが顕著である。

表－２ 出葉期の平年比較（気象感応試験 7月5日現在）

試験区	年次	出葉期									
		5葉	6葉	7葉	8葉	9葉	10葉	11葉	12葉	13葉	
標植 (5月15日移植 基準)	R8	5/21	5/27	6/2	6/7	6/13	6/18	6/26			
	R7	5/25	6/1	6/7	6/12	6/17	6/23	6/30	7/7	7/15	
	平年	5/24	5/29	6/5	6/11	6/16	6/22	7/1	7/11	7/17	
	平年差	－3	－2	－3	－4	－3	－4	－5			
晩植 (5月25日移植 基準)	R8	5/29	6/2	6/8	6/14	6/18	6/24	7/2			
	R7	6/1	6/7	6/12	6/17	6/21	6/25	7/3	7/11	7/18	
	平年	5/31	6/6	6/11	6/16	6/21	6/27	7/4	7/13	7/21	
	平年差	－2	－4	－3	－2	－3	－3	－2			

注1) 標植の平年値は、H12～R7までの平均。晩植の平年値は、H29～R7までの平均。

注2) 移植時葉数の平年値は標植は3.4葉、晩植は3.6葉。本年は標植は3.4葉、晩植は3.8葉。

4) 分げつの発生状況

標植では、1次分げつの発生は平年並だが、2次分げつでは2～4節で平年より多かった（表－3 標植）。晩植では、1次分げつの3節と7節の発生が平年より多く、2次分げつでは、特に3節と4節の発生がかなり多かった（表－3 晩植）。

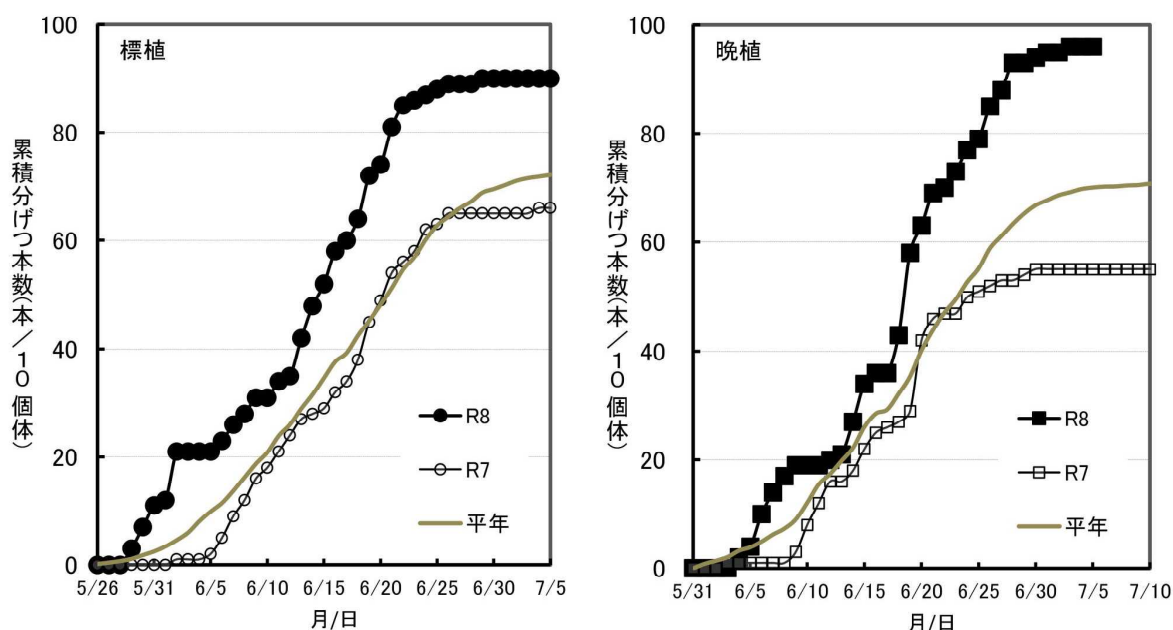
累積分げつ本数の推移では、標植では6月22日頃、晩植では6月28日頃から分げつの発生が鈍化した、平年よりかなり多く推移した（図－2）。

表－3 7月5日現在の分げつ発生状況（本／10個体）

試験区	1次分げつ								2次分げつ					
	1節	2節	3節	4節	5節	6節	7節	8節	1節	2節	3節	4節	5節	6節
標植	1	3	8	10	10	10	8		1	4	13	18	7	
(平年)	0	3	7	10	10	10	7	1	1	2	9	12	6	1
晩植	0	2	10	10	10	10	9		1	1	17	22	7	
(平年)	0	2	7	10	10	10	6	1	0	2	7	14	5	1

注1) 平年は、標植；H13～R7の平均、晩植；H29～R7の平均。

注2) 小数点以下切り上げによる表記のため、分げつの合計数と図－2の累積分げつ本数とは異なる。



図－2 分げつの発生推移（10個体合計）

累積分げつ本数は10個体あたりの値、平年値は標植；H12～R7、晩植；H29～R7の平均

5) 土壌残存窒素量(7月5日現在)

7月5日現在、標植の土壌残存窒素量は、0.3mg/100g土で平年よりかなり低く、晩植でも0.2mg/100g土と平年を大きく下回った。標植と晩植ともに茎数が多く、旺盛な生育のため、窒素吸収量が多いことと、また早い中干しにより田面の乾燥も順調だったことから土壌の残存窒素量が平年より早く消失したと推測される。今後は直ちに中干しを終了し、急激な葉色の低下に注意しなければならない。

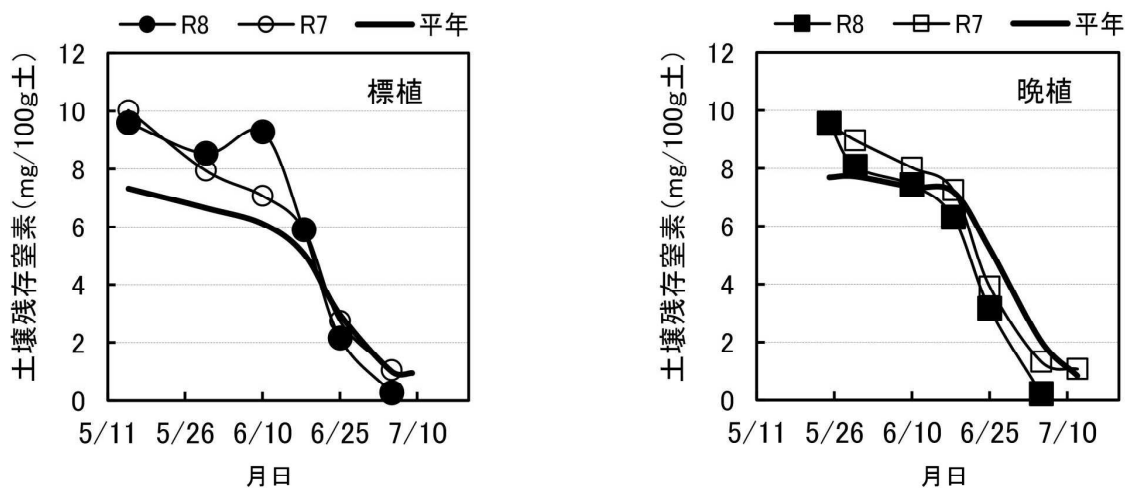


図-3 土壌残存窒素量の推移

注) 基肥窒素量: N 7 g/m²。平年値: 標植はH12~R7、晩植はH29~R7の平均値

(2) 直播作況試験

1) 生育概況

7月6日の農試の調査結果は、草丈48.9cm (平年比113%)、m²当たり茎数838 (同161%)、葉数9.1葉 (同+0.3葉)、葉緑素計値39.3 (平年比94%) だった。(表-4)

表-4 農試作況ほ場の生育概況 (あきたこまち、湛水土中条播、5月11日播種)

設置場所	草丈			m ² 当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
	本年 (cm)	前年比 (%)	前年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	前年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	前年比 (%)
農試	48.9	98	113	838	224	161	9.1	+0.1	+0.3	39.3	93	94

注) 平年値: 過去10年間 (H27~R7) の平均値

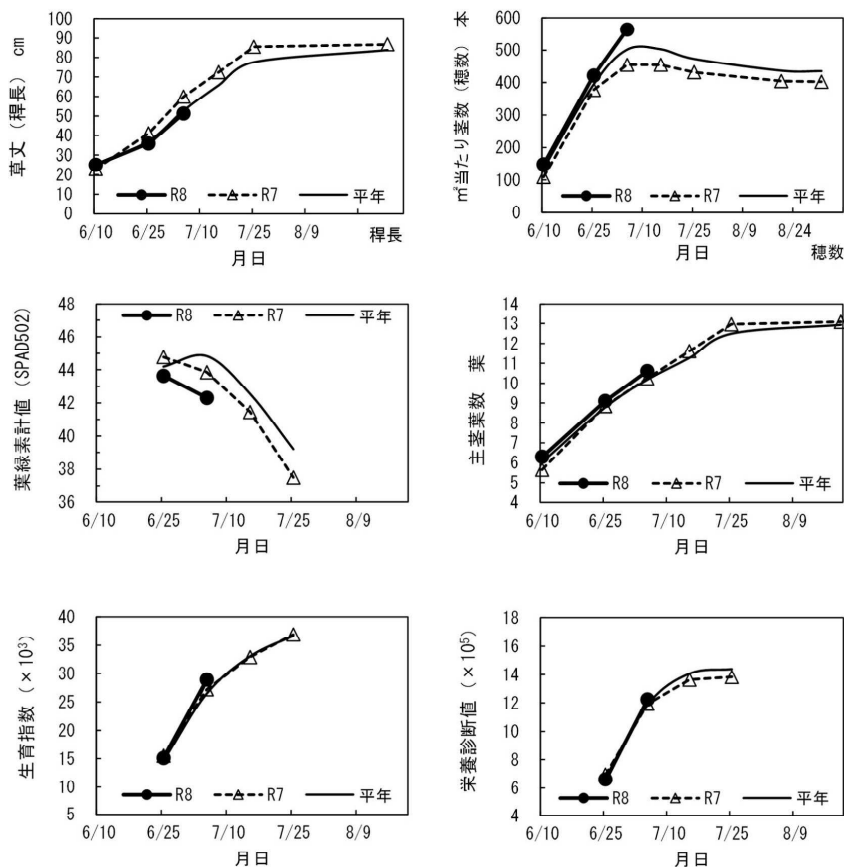
4 今後の生育の見通しと栽培管理

(1) 本年の水稻生育の特徴（各地域振興局、定点調査結果）

7月6日現在、全県の「あきたこまち」の生育は、草丈は概ね平年並、茎数は平年を大きく上回るほ場が多く、葉緑素計値は平年並～低く、葉数は平年より多い。また全県平均の生育指数はやや大きく、栄養診断値は、平年並に経過している（図－4）。

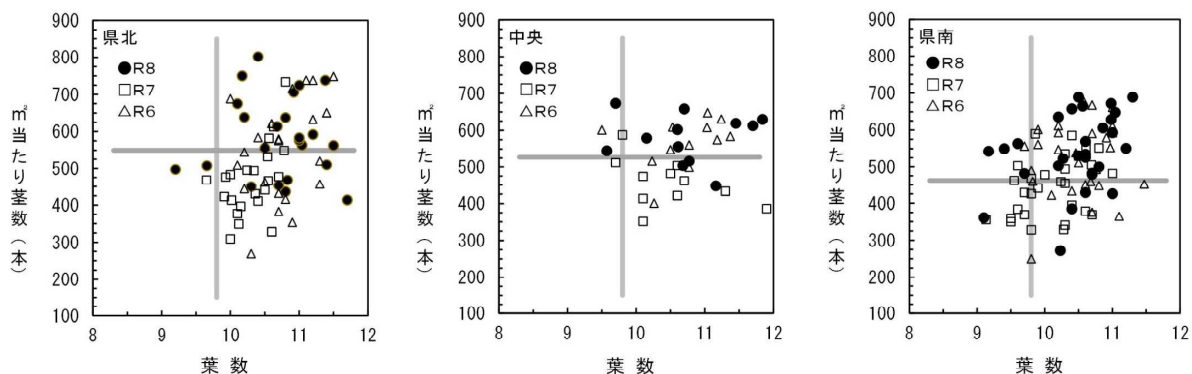
一方で生育のほ場間差は大きく、一部では葉数が進んでも、理想生育の茎数に満たないほ場も見られる（図－5）。

また、葉数では11葉期に近い、あるいは11葉を上回っているほ場もあることから、各ほ場の幼穂形成期を把握して、栄養診断に基づいた追肥の時期と量を決定する。



図－4 各地域振興局定点調査結果（あきたこまち、全県平均）

生育指数＝草丈(cm)×茎数(本/m²)、栄養診断値＝草丈(cm)×茎数(本/m²)×葉緑素計値



図－5 調査地点別葉数と茎数の関係（あきたこまち）

縦横線は地域別理想生育水準（交点“+”が7月5日の理想生育）

(2) 幼穂形成期（幼穂長2mm期）および減数分裂期の予測（表－5、表－6）

各アメダス観測地点の7月5日までの平均気温と7月6日以降の平年気温を用いた発育モデルによる「あきたこまち」の苗種別、移植期別の幼穂形成期および減数分裂期への到達時期予測を示した。地点、移植日、苗の種類から、該当する到達時期を参照し、ほ場における各生育ステージの目安とするが、実際の生育は予測より早い場合があり、予測の4、5日前からは場で幼穂長や葉耳間長を確認する。

※※最新の生育予測は下記URLをご確認ください。

(<https://rice-forecast.s3.ap-northeast-1.amazonaws.com/index.html>)



こちらのQRからも

「あきたこまち生育予測システム」を御利用頂けます。

このシステムは、「農業DXを牽引する公設試デジタル推進事業」により作成されました。

表－５ 幼穂形成期の予測（あきたこまち）

アメダス 観測地点	移植時期	稚苗			中苗		
	5月〇日	7月6日以降の想定気温経過（平年の日平均気温に対する差）					
		+ 2℃	± 0℃	－ 2℃	+ 2℃	± 0℃	－ 2℃
鹿角	10日	7月12日	7月12日	7月13日	7月8日	7月9日	7月9日
	15日	7月15日	7月16日	7月17日	7月11日	7月12日	7月13日
	20日	7月18日	7月19日	7月21日	7月14日	7月15日	7月17日
	25日	7月21日	7月22日	7月24日	7月16日	7月18日	7月20日
大館	10日	7月11日	7月12日	7月12日	7月8日	7月8日	7月9日
	15日	7月14日	7月15日	7月16日	7月10日	7月11日	7月12日
	20日	7月17日	7月19日	7月20日	7月13日	7月14日	7月16日
	25日	7月20日	7月22日	7月23日	7月16日	7月17日	7月19日
鷹巣	10日	7月10日	7月10日	7月11日	7月6日	7月6日	7月7日
	15日	7月13日	7月14日	7月15日	7月9日	7月9日	7月10日
	20日	7月16日	7月17日	7月19日	7月12日	7月13日	7月14日
	25日	7月19日	7月21日	7月22日	7月14日	7月16日	7月17日
能代	10日	7月9日	7月10日	7月10日	7月6日	7月6日	7月6日
	15日	7月12日	7月13日	7月14日	7月8日	7月9日	7月9日
	20日	7月16日	7月17日	7月18日	7月11日	7月12日	7月13日
	25日	7月19日	7月20日	7月22日	7月14日	7月15日	7月16日
大潟	10日	7月10日	7月11日	7月11日	7月7日	7月7日	7月7日
	15日	7月13日	7月14日	7月15日	7月9日	7月10日	7月11日
	20日	7月17日	7月18日	7月19日	7月12日	7月13日	7月14日
	25日	7月19日	7月21日	7月22日	7月15日	7月16日	7月17日
秋田	10日	7月7日	7月7日	7月7日	7月3日	7月3日	7月3日
	15日	7月10日	7月11日	7月11日	7月6日	7月6日	7月6日
	20日	7月14日	7月15日	7月15日	7月9日	7月9日	7月10日
	25日	7月17日	7月18日	7月19日	7月11日	7月12日	7月13日
大正寺	10日	7月11日	7月11日	7月12日	7月7日	7月7日	7月8日
	15日	7月14日	7月14日	7月15日	7月10日	7月10日	7月11日
	20日	7月17日	7月18日	7月19日	7月13日	7月13日	7月15日
	25日	7月20日	7月21日	7月23日	7月15日	7月16日	7月18日
本荘	10日	7月9日	7月9日	7月10日	7月5日	7月5日	7月5日
	15日	7月12日	7月13日	7月13日	7月8日	7月8日	7月8日
	20日	7月15日	7月16日	7月17日	7月11日	7月11日	7月12日
	25日	7月18日	7月19日	7月21日	7月13日	7月14日	7月15日
大曲	15日	7月11日	7月11日	7月12日	7月6日	7月6日	7月6日
	20日	7月14日	7月15日	7月16日	7月9日	7月10日	7月10日
	25日	7月17日	7月18日	7月20日	7月12日	7月13日	7月14日
	30日	7月21日	7月23日	7月24日	7月16日	7月17日	7月19日
角館	15日	7月11日	7月12日	7月12日	7月7日	7月7日	7月7日
	20日	7月15日	7月16日	7月17日	7月10日	7月11日	7月11日
	25日	7月18日	7月19日	7月20日	7月13日	7月13日	7月15日
	30日	7月22日	7月23日	7月25日	7月16日	7月18日	7月19日
横手	15日	7月10日	7月11日	7月11日	7月6日	7月6日	7月6日
	20日	7月14日	7月15日	7月16日	7月9日	7月10日	7月10日
	25日	7月17日	7月18日	7月19日	7月12日	7月12日	7月13日
	30日	7月21日	7月22日	7月24日	7月15日	7月17日	7月18日
湯沢	15日	7月11日	7月12日	7月12日	7月7日	7月7日	7月7日
	20日	7月15日	7月16日	7月17日	7月10日	7月11日	7月12日
	25日	7月18日	7月19日	7月20日	7月13日	7月14日	7月15日
	30日	7月22日	7月23日	7月25日	7月17日	7月18日	7月20日

※欠測日および７月６日以降の値は、平年値を代用し計算した。

表－６ 減数分裂期の予測（あきたこまち）

アメダス 観測地点	移植時期	稚苗			中苗		
	5月〇日	7月6日以降の想定気温経過（平年の日平均気温に対する差）					
		+ 2℃	± 0℃	－ 2℃	+ 2℃	± 0℃	－ 2℃
鹿角	10日	7月24日	7月27日	7月29日	7月22日	7月24日	7月26日
	15日	7月27日	7月29日	8月1日	7月24日	7月26日	7月29日
	20日	7月30日	8月2日	8月5日	7月27日	7月29日	8月2日
	25日	8月2日	8月4日	8月8日	7月29日	8月1日	8月4日
大館	10日	7月24日	7月25日	7月28日	7月21日	7月22日	7月25日
	15日	7月26日	7月28日	7月31日	7月23日	7月25日	7月28日
	20日	7月29日	7月31日	8月3日	7月26日	7月28日	7月31日
	25日	7月31日	8月3日	8月6日	7月28日	7月30日	8月3日
鷹巣	10日	7月22日	7月24日	7月26日	7月19日	7月21日	7月23日
	15日	7月25日	7月27日	7月29日	7月22日	7月24日	7月26日
	20日	7月28日	7月30日	8月2日	7月24日	7月27日	7月29日
	25日	7月30日	8月2日	8月5日	7月27日	7月29日	8月1日
能代	10日	7月22日	7月23日	7月25日	7月19日	7月20日	7月22日
	15日	7月24日	7月26日	7月28日	7月21日	7月23日	7月25日
	20日	7月27日	7月29日	8月1日	7月24日	7月26日	7月28日
	25日	7月30日	8月1日	8月4日	7月26日	7月28日	7月31日
大潟	10日	7月23日	7月25日	7月27日	7月20日	7月22日	7月24日
	15日	7月25日	7月27日	7月30日	7月22日	7月24日	7月26日
	20日	7月28日	7月30日	8月2日	7月25日	7月27日	7月30日
	25日	7月31日	8月2日	8月5日	7月27日	7月29日	8月1日
秋田	10日	7月19日	7月20日	7月22日	7月15日	7月17日	7月18日
	15日	7月22日	7月23日	7月25日	7月18日	7月20日	7月21日
	20日	7月25日	7月27日	7月29日	7月21日	7月23日	7月25日
	25日	7月27日	7月30日	8月1日	7月23日	7月25日	7月28日
大正寺	10日	7月23日	7月25日	7月27日	7月20日	7月22日	7月24日
	15日	7月26日	7月28日	7月30日	7月22日	7月24日	7月27日
	20日	7月28日	7月31日	8月3日	7月25日	7月27日	7月30日
	25日	7月31日	8月2日	8月6日	7月27日	7月30日	8月2日
本荘	10日	7月21日	7月23日	7月25日	7月18日	7月19日	7月21日
	15日	7月24日	7月25日	7月28日	7月20日	7月22日	7月24日
	20日	7月26日	7月28日	7月31日	7月23日	7月25日	7月27日
	25日	7月29日	7月31日	8月3日	7月25日	7月27日	7月30日
大曲	15日	7月22日	7月24日	7月26日	7月19日	7月20日	7月22日
	20日	7月25日	7月27日	7月30日	7月22日	7月23日	7月26日
	25日	7月28日	7月30日	8月2日	7月24日	7月26日	7月29日
	30日	8月1日	8月3日	8月6日	7月27日	7月30日	8月2日
角館	15日	7月23日	7月25日	7月27日	7月19日	7月21日	7月23日
	20日	7月26日	7月28日	7月31日	7月22日	7月24日	7月27日
	25日	7月29日	7月31日	8月3日	7月25日	7月27日	7月30日
	30日	8月1日	8月4日	8月7日	7月28日	7月31日	8月3日
横手	15日	7月22日	7月23日	7月25日	7月18日	7月20日	7月21日
	20日	7月25日	7月27日	7月29日	7月21日	7月23日	7月25日
	25日	7月28日	7月30日	8月1日	7月24日	7月26日	7月28日
	30日	7月31日	8月3日	8月6日	7月27日	7月29日	8月1日
湯沢	15日	7月23日	7月25日	7月27日	7月19日	7月21日	7月23日
	20日	7月26日	7月28日	7月31日	7月23日	7月25日	7月27日
	25日	7月29日	7月31日	8月3日	7月25日	7月27日	7月30日
	30日	8月1日	8月4日	8月7日	7月28日	7月31日	8月3日

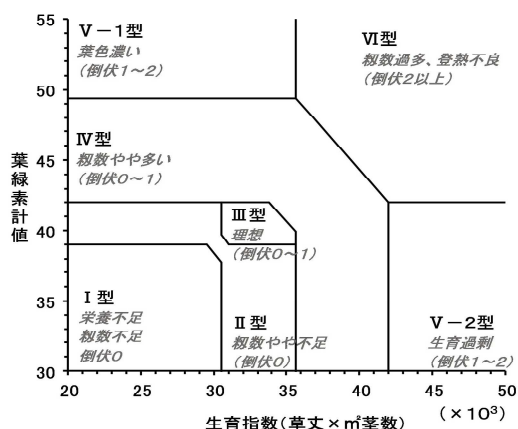
※欠測日および7月6日以降の値は、平年値を代用し計算した。

(3) 栄養診断に基づく「あきたこまち」の栽培管理

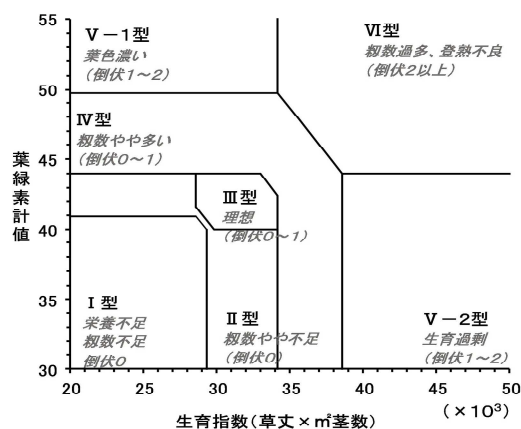
1) 幼穂形成期（幼穂長2mm、11葉期頃）における栄養診断

追肥の目安は、栄養診断図に示したⅠ～Ⅴ型の生育型に対応した窒素追肥量を参考に
にする。ただし肥効調節型肥料を基肥等で使用した場合、追肥は、施用済み窒素成分
量などを考慮し、慎重に判断する。

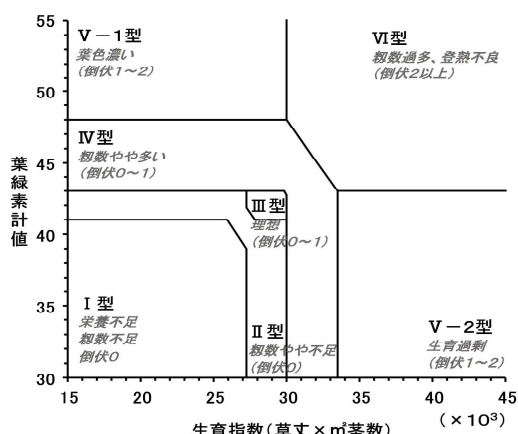
また、幼穂形成期の生育調査により栄養診断図のⅥ型に該当する場合は、緊急処置
として倒伏軽減剤の使用を検討する。



幼穂形成期における栄養診断(県北)



幼穂形成期における栄養診断(中央)



幼穂形成期における栄養診断(県南)

生育型	窒素追肥量(kg/10a)	
	幼穂形成期	減数分裂期
Ⅰ型	2kg	2kg
Ⅱ型	2kg	2kg
Ⅲ型	ムラ直し1kg	2kg
Ⅳ型	なし	2kg
Ⅴ-1型	なし	ムラ直し1kg
Ⅴ-2型	なし	ムラ直し1kg
Ⅵ型	なし	なし

(注) 目標収量 570kg/10a、あきたこまち

図－6 幼穂形成期における栄養診断図

(稲作指導指針p. 77～80参照)

2) 幼穂形成期相当の葉数(10.6葉以上)の調査ほ場における栄養診断

7月6日時点で葉数10.6以上だった「あきたこまち」の水稲定点調査ほ場は、県北で15地点、中央で9地点、県南で16地点あった。そのいくつかのほ場では、幼穂長2mm以上を確認しており、平年よりかなり早い幼穂形成期に達している。ここでは便宜的に葉数10.6葉以上を幼穂形成期相当とし、栄養診断を試行した(図-7)。その結果、県北と中央はⅡ型からⅣ型が多く、県北は中央より葉色が濃い傾向にあった。県南はⅡ型からⅥ型まであり、葉色が濃く、生育指数の大きいほ場もあった。特にⅤ-2型とⅥ型に診断された地点は、今後、倒伏に注意しなければならない。

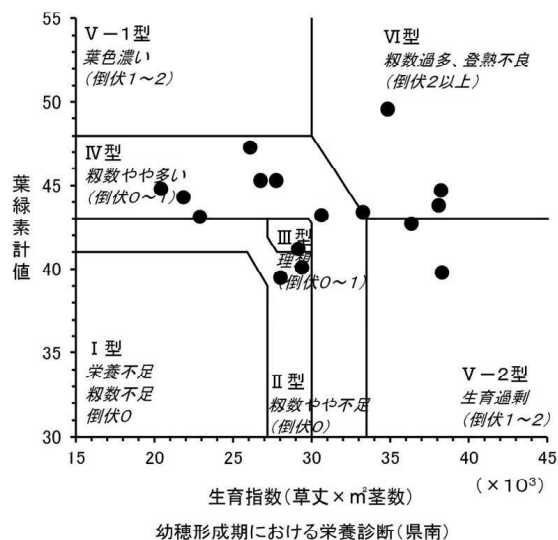
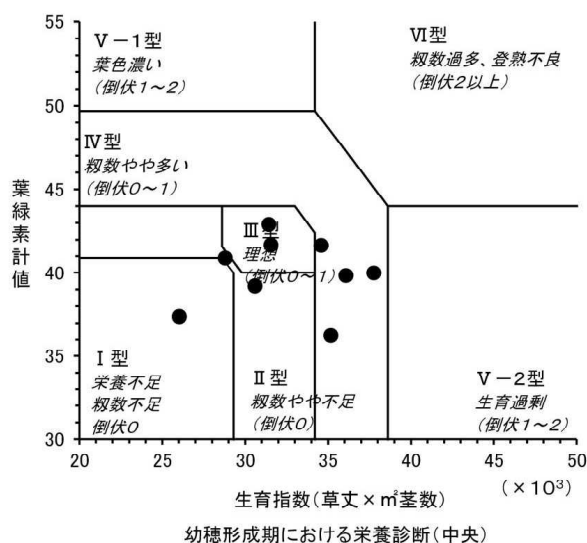
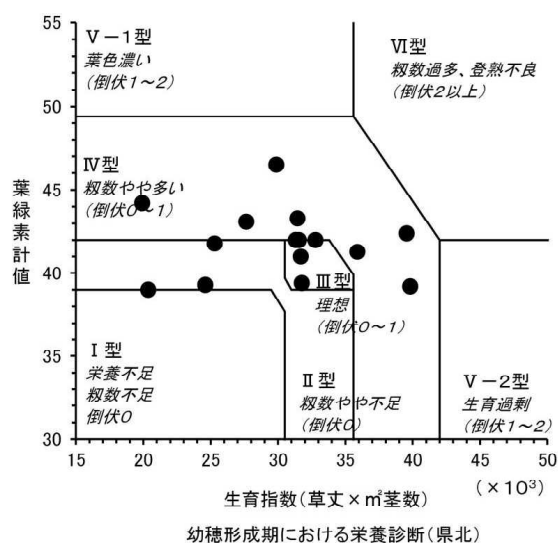
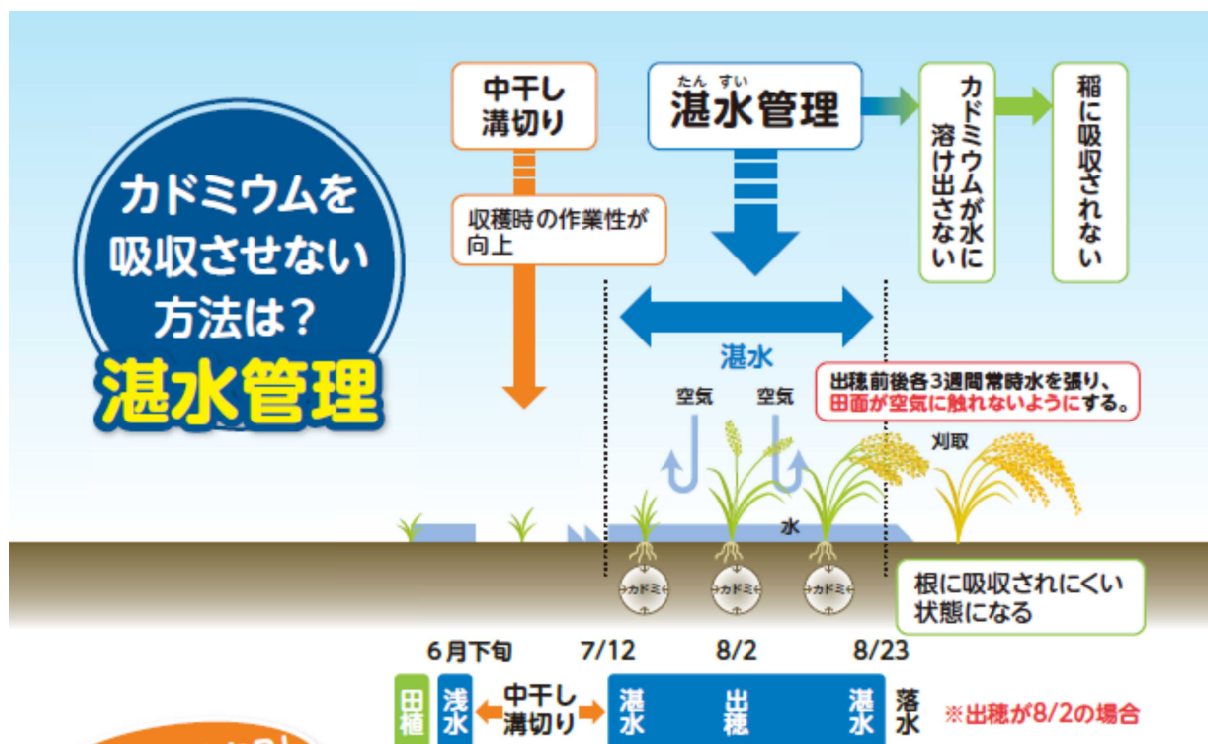


図-7 幼穂形成期相当(葉数10.6葉以上)の定点調査ほ場における栄養診断図



「あきたこまちR」
以外の品種

湛水管理のポイント

- 6月下旬から「中干し」を開始！ その際、強い中干しは避ける！
- ぬかりやすく、水はけが悪い水田では、中干しの際に「溝切り」を実施する！
- 「出穂前後各3週間」は常時水を張り、田面を空気に触れさせない！ 完全落水は遅めにする！

※「あきたこまちR」は湛水管理が不要のため、通常の水管理を行います。

～汚染米が発生すると～

基準値を超えた米は、**湛水管理の実施を条件**として、県が買入・処分を行います。
ただし、同一生産者において、汚染米が連続発生した場合、**県の買入価格が減額**となります。

- ◎ 2年連続発生 …… 通常買入価格の1／2の価格
- ◎ 3年以上連続発生 …… 通常買入価格の1／3の価格

(例) 通常買入価格が、6,000円/30kgの場合
2年連続発生 …… 3,000円/30kg
3年連続発生 …… 2,000円/30kg

(お問い合わせ先) 秋田県農林水産部水田総合利用課・地域振興局農林部・市町村・JAへ



大豆ほ場への 難防除雑草の侵入に注意

近年、これまでとは異なる種類の雑草（帰化アサガオ類など）が大豆ほ場で問題となる事例が増えています。これらの雑草は、ほ場にまん延すると完全に防除することが難しいため、**初期対応が重要です**。ほ場やその周辺で謎わしい雑草をみかけた場合は、指導機関へ相談するなど、初期対応を徹底してください！

つる性の帰化雑草

- 帰化アサガオ類やアレチウリは、種子で繁殖する一年生つる性雑草。
- 発生量が多いと大豆を覆い尽くして収穫不能になるなど、甚大な被害をもたらす。
- 畦畔から侵入することがあるため、畦畔管理も重要となる。

アレチウリ



形態・特徴

- 高さは5～8mに達する。
- 葉はキュウリやカボチャに似る。
- 花は緑白色で、直径1cm程度、5枚の花弁からなる。
- トゲだらけの果実が塊となって乾実する。
- 水系を過して種子が移動する可能性があるため、河川が浸透した場合等も注意が必要。

特定外来生物に指定されており、生きたまま（種子含む）他の場所へ運ぶことが原則禁止されている。

帰化アサガオ類

本県大豆ほ場では、アメリカアサガオ、マルバルコウ、マメアサガオの3種が確認されている。



アメリカアサガオ

形態・特徴

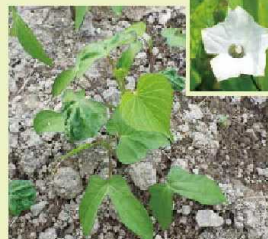
- 長さは数mに達する。花は赤～黄色と様々で、直径3cm程度の漏斗型、上からみるとほぼ円形である。帰化アサガオ類では県内で最も多くみられる。
- 葉が分裂しないマルバアメリカアサガオは、アメリカアサガオの変種である。



マルバルコウ

形態・特徴

- 長さは3～4mに達する。
- 角があるハート型の葉が特徴。
- 花は朱赤色で、直径1.5～2cm程度の五角形漏斗型である。



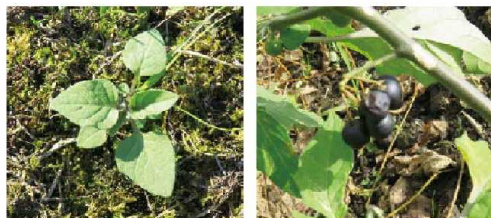
マメアサガオ

形態・特徴

- 長さは数mに達する。葉縁は紫色を帯びることが多い。
- 花は白色、まれにピンク色で、直径1.5cm程度である。

イヌホオズキ

- 種子で繁殖する一年生雑草。果実を含めて全草に毒がある有毒植物である。
- 主な被害は、減収や果実などによる汚損粒の発生である。
- 畦畔から侵入することがあるため、畦畔管理も重要となる。



イヌホオズキの幼植物（左）と果実（右）



形態・特徴

- 基部からよく分枝し、高さは50～90cmに達する。
- 葉は先のとがった卵形で、縁に不揃いの鋸歯（ざざぎざ）がある。
- 花は白色で5裂し、直径1cm程度である。
- 果実は球形で直径7～10mm。未熟果は緑色であり、熟すと黒色になる。

作成：秋田県植物防疫協会 編集：秋田県農林水産部（平成30年2月作成）

マルバルコウの写真（全量）は、秋田県立大学名誉教授 森田弘彦氏 提供

各地域における技術情報等のお知らせ

各地域における技術情報等についての問い合わせは、最寄りの地域振興局農林部農業振興普及課に電話またはFAXをお願いします。

各地域振興局	電話番号	FAX番号
鹿 角 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-23-3683	0186-23-7069
北秋田 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-62-1835	0186-63-0705
山 本 地域振興局農林部農業振興普及課	0185-52-1241	0185-54-8001
秋 田 地域振興局農林部農業振興普及課	018-860-3410	018-860-3363
由 利 地域振興局農林部農業振興普及課	0184-22-8354	0184-22-6974
仙 北 地域振興局農林部農業振興普及課	0187-63-6110	0187-63-6104
平 鹿 地域振興局農林部農業振興普及課	0182-32-1805	0182-33-2352
雄 勝 地域振興局農林部農業振興普及課	0183-73-5114	0183-72-6897

〇SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）LINEで情報発信を行っています

秋田県稲作技術情報 「秋田の米ぢから」



水稻栽培に関する情報をリアルタイムで発信しています。

<主な配信内容>

- ・ 秋田県内の水稻の生育状況
- ・ 水稻および大豆の技術情報
- ・ 異常気象対策
- ・ その他、秋田米に関する情報



こちらのQRから
登録できます

記事についてのお問い合わせは

秋田県農業試験場

作物部
生産環境部

TEL 018-881-3330
内線(422・423・424)
内線(306・310)

秋田県病害虫防除所

TEL 018-881-3660

秋田地方气象台

TEL 018-864-3955

東北農政局秋田県拠点

TEL 018-895-7303

秋田県農林水産部水田総合利用課（農産・複合推進チーム）

TEL 018-860-1786

園芸振興課（調整・普及チーム）

TEL 018-860-1801

【次回の発行日は7月17日（金）の予定です】